

## 畏獣像小考

### ―六世紀前半作例の性質と機能を中心に―

《キーワード》 辟邪 自然・動物神 十神王 瑞獣 先導者

田林啓

はじめに

「畏獣」と現在一般に称される凶像が存在する(図1)。それは、二足立ちした獣像であり、その身体は筋骨隆々とし、肩からは羽が生え、一人前に半袴を穿く。多くの場合、獅子或いは虎のような顔をしており、肢先は鳥の様である。大きく口を開けて、中から歯を見せたり舌を垂らしたりし、それと呼応するように前後肢を大きく広げて奔走する様子を示し、何かに襲いかかっているようである。こうした身体的特徴及び姿態は恐怖感を与える効果を生ませるものであるが、どこことなく滑稽で、愛らしさが漂う。

この畏獣像について早い時期に着目した研究者は長廣敏雄氏である。<sup>1)</sup>氏は鬼神を研究する上でまず、『山海経』の奇獣に関する記述を並列し、その中で郭璞による注に奇獣が「畏獣画」中に描かれると述べられているのを以て、晋の郭璞の時代には「畏獣画」というジャンルがあったこと示す。<sup>2)</sup>その後、氏の論は現在で言うところ



図1、畏獣像 馮邕妻元氏墓誌 本体右側面 北魏正光3年(522) ボストン美術館蔵

